

研究発表

- 英語学習において日本人学習者が用いる学習方略に……71 - 74
関する研究
- 言語（国語）学習において日本人学習者が用いる……75 - 78
学習方略に関する研究

英語学習において日本人学習者が用いる学習方略に関する研究

A Study of Learning Strategies Used by EFL Japanese Learners

1. 研究の背景

語学（英語）教育の分野で、国内では1980年代に入ると、教育目標として自己教育力の伸張と個人差に応じた教育の推進が掲げられ、学習者の個人特性に注目しながら英語の学習成果の向上を目指すようになった。言語学習における学習者特性は多岐多様ではあるが、Skehan(1991)は個人差という観点から学習者特性を捉え、学習方略、学習スタイル、適性、動機付けをとりわけ重要な特性であると指摘している。

最近、語学（英語）教育の分野における国内外の研究状況をみると、学習方略や、リーディング、コミュニケーションなどの範囲を限定した方略に関する研究が盛んである。ここで、国内の学習方略研究を概観すると、研究に用いられている調査票は欧米で開発されたものの翻訳版であることが多く、筆者がこれまで実施した、翻訳した調査項目を用いて実施した調査結果からも、この種の調査票が日本人学習者に必ずしも合致しているとは言い難い。つまり、被験者に合致した、より包括的な内容の調査票を作成することことが、日本人英語学習者の用いる学習方略を明らかにしていくための最重要課題であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、①日本人学習者に適した英語学習方略の調査票を作成すること、②作成した調査票により、日本人高校生の英語学習方略を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 調査1：

- ①対象者： 国立大学1年生189名
- ②測定具： 100項目から成るアンケート。内訳は、SILL50項目、その他自作の項目など50項目
- ③調査実施時期： 1996年 4月
- ④手続き： アンケートは 5肢選択形式。記入は記名式で、約25分で集団調査として実施した。
- ⑤分析方法： 因子分析

3.2 調査2：

- ①対象者： 茨城県公立高校3年生151名

- ②測定具： 17項目から成るアンケート。
- ③調査実施時期： 1997年 7月
- ④手続き： アンケートは 5肢選択形式。記入は記名式で、約 5分で集団調査として実施した。
- ⑤分析方法： 因子分析

4. 研究の結果と考察

研究の結果は以下のとおりである。

4.1 調査 1 :

調査 1 で扱った 100項目のうち、平均、標準偏差から、天井効果、フロア効果を示した15項目を削除した後、85項目を基に因子分析を実施した結果、5因子53項目が抽出された。この5因子はそれぞれ、積極的英語接触努力、コミュニケーション志向、文法重視計画学習、個人英語学習方法、基本英単語・英文の暗記と命名した。以上の結果、学習方略研究に用いられることの多いOxfordの50項目は、日本人英語学習者の学習方略測定項目として、必ずしも最適ではないことが明らかになった。

また、5因子53項目の中から、各因子の内容を代表していると考えられる項目を選択し、最終的に17項目を選択した。

4.2 調査 2 :

①平均・標準偏差

表 1 : 平均・標準偏差

| 項目 | X | SD | 項目 | X | SD |
|----|------|------|----|------|------|
| 1 | 3.44 | 1.13 | 10 | 3.57 | 1.10 |
| 2 | 3.34 | 1.18 | 11 | 3.47 | 1.01 |
| 3 | 3.64 | 1.11 | 12 | 3.74 | 0.90 |
| 4 | 2.91 | 1.03 | 13 | 3.27 | 1.15 |
| 5 | 3.17 | 1.11 | 14 | 3.85 | 0.93 |
| 6 | 3.21 | 1.20 | 15 | 3.14 | 1.05 |
| 7 | 2.50 | 1.21 | 16 | 1.85 | 0.92 |
| 8 | 3.38 | 1.02 | 17 | 2.03 | 1.03 |
| 9 | 3.28 | 1.00 | | | |

英語の学習方略17項目について平均と標準偏差を求めたが、その結果は表 1 に示

すとおりである。表1から明らかなように、天井効果、フロア効果を示した項目はなかった。

② 因子分析結果

学習方略に関する17項目の得点について、共通性の初期値を SMCとした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値に基づいて3因子解を適当と判断した。その後再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行し、バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た(表2)。

表2：バリマクス回転後の因子パターン

| 項目 | 因子 I | 因子 II | 因子 III | 共通性 |
|----|---------|---------|----------|---------|
| 2 | 0.75598 | 0.18176 | 0.22408 | 0.65475 |
| 3 | 0.74325 | 0.08558 | 0.15007 | 0.58227 |
| 1 | 0.71878 | 0.19854 | 0.05910 | 0.55956 |
| 4 | 0.70525 | 0.23556 | 0.06487 | 0.55707 |
| 6 | 0.69721 | 0.21440 | 0.21736 | 0.57931 |
| 7 | 0.58763 | 0.26178 | 0.23100 | 0.46720 |
| 5 | 0.47027 | 0.12678 | 0.24741 | 0.29844 |
| 10 | 0.00508 | 0.56961 | 0.01541 | 0.32472 |
| 11 | 0.17858 | 0.55785 | -0.01058 | 0.34320 |
| 16 | 0.18533 | 0.51685 | 0.09459 | 0.31043 |
| 8 | 0.36926 | 0.47263 | 0.14176 | 0.37983 |
| 13 | 0.26834 | 0.46237 | 0.23874 | 0.34279 |
| 9 | 0.10710 | 0.41870 | 0.13277 | 0.20441 |
| 17 | 0.26382 | 0.30913 | 0.24597 | 0.22566 |
| 14 | 0.13846 | 0.04504 | 0.67414 | 0.47567 |
| 15 | 0.23057 | 0.05599 | 0.61643 | 0.43628 |
| 12 | 0.10855 | 0.20820 | 0.51947 | 0.32497 |

説明 3.63032 1.92516 1.51106 7.00654
分散

(注) 網かけされた数値は0.40以上

次に3因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。

以上の結果から、抽出された3因子は次のように命名した。

- 因子Ⅰ：コミュニケーション志向
- 因子Ⅱ：英文中心計画的英語接触努力
- 因子Ⅲ：単語中心暗記学習

以上の3因子は、日本人を対象とした先行研究においても報告されているように(Watanabe, 1991)、欧米での研究結果とは異なっていた。つまりSILLの下位分類とは完全に一致してはおらず、むしろ6つの分類が組み合わされて、各因子が成り立っていた。

参考文献：

- 北條礼子(1996a) 「日本人EFL学習者の学習方略に関する研究(1)」
上越教育大学研究紀要 第16巻 第1号 185～196頁
- _____ (1996b) 「日本人EFL学習者の学習方略に関する研究(2)」
上越教育大学研究紀要 第16巻 第2号 583～596頁

[本研究は、平成8年度科学研究補助金基盤研究C「英語学習において日本人学習者が用いる学習方略の調査票開発とモデル構築に関する研究」の成果を基にしたものである。]

言語(国語)学習において日本人学習者が用いる学習方略に関する研究
A Study of Learning Strategies Used by EFL Japanese Learners

1. 研究の背景

言語(英語)教育の分野で、最近学習方略だけではなく読解やコミュニケーションに関するいわゆる分野別ともいうべき方略研究が数多く見受けられるようになった。欧米の先行選考研究を見ると、特に読解学習において母語と外国語における転移について対立する研究仮説が提唱されている。しかし国内では英語の学習方略に関する研究が見られるようになってきたのに対して、学習者の母語である国語の調査項目は皆無に近いとあってよい状況であろう。外国語(英語)学習における学習方略が母語における学習方略の影響を受けているのかどうかを検討することは、外国語学習における学習方略を明らかにしていく上で、意味があることであると考えられる。

ここで、日本人学習者が国語学習で用いている学習方略と外国語(英語)で用いている学習方略がどのような関係にあるのか、つまりどのような類似点、相違点があるのかを検討するには、まず国語学習における学習方略を調査する項目の開発がその第一歩であることには異論がないであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、①日本人学習者に適した国語学習方略の調査票を作成すること、②作成した調査票により、日本人高校生の国語学習方略を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 調査1:

- ①対象者: 茨城県公立高校3年生131名
- ②測定具: 40項目から成るアンケート
- ③調査実施時期: 1998年3月
- ④手続き: アンケートは5肢選択形式。記入は記名式で、約10分で集団調査として実施した。
- ⑤分析方法: 因子分析

3.2 調査2:

調査2は、対象者が国立大学1年生 139名であり、調査実施時期が1998年4月であることを除いて、調査1に同じ。

4. 研究の結果と考察

4.1 調査1:

①平均・標準偏差

調査1で扱った40項目のうち、表1に示した平均、標準偏差から、天井効果、フロア効果を示した5項目を削除した後、35項目を基に因子分析を実施した結果、4因子18項目が抽出された。

表1: 調査1の平均・標準偏差(N=131)

| 項目 | X | SD | 項目 | X | SD |
|-----------------|------|------|-----------------|------|------|
| 1 | 2.44 | 1.08 | 21 | 3.63 | 1.06 |
| 2 | 3.06 | 1.30 | 22 | 3.44 | 1.16 |
| 3 | 2.46 | 1.03 | 23 | 2.52 | 1.17 |
| 4 | 3.33 | 1.03 | 24 | 3.56 | 1.10 |
| 5 | 2.79 | 1.18 | 25 | 2.76 | 1.13 |
| 6 | 2.66 | 1.16 | 26 | 2.27 | 1.01 |
| 7 | 2.34 | 1.17 | 27 | 3.34 | 1.02 |
| 8 [▽] | 1.82 | 0.84 | 28 | 3.68 | 1.02 |
| 9 | 3.38 | 1.18 | 29 | 2.44 | 1.02 |
| 10 | 2.49 | 1.01 | 30 | 2.86 | 1.07 |
| 11 | 2.96 | 1.15 | 31 | 3.87 | 0.91 |
| 12 | 3.48 | 1.22 | 32 | 3.73 | 0.97 |
| 13 | 3.16 | 1.28 | 33 | 3.09 | 1.16 |
| 14 [▽] | 1.85 | 0.87 | 34 [△] | 4.30 | 0.83 |
| 15 [▽] | 1.45 | 0.56 | 35 | 2.96 | 1.00 |
| 16 | 3.79 | 1.04 | 36 | 2.90 | 1.01 |
| 17 | 3.08 | 1.08 | 37 | 3.89 | 0.90 |
| 18 | 2.64 | 1.12 | 38 | 2.87 | 1.02 |
| 19 [▽] | 1.38 | 0.85 | 39 | 2.47 | 1.13 |
| 20 | 2.66 | 0.97 | 40 | 3.87 | 0.87 |

△ 天井効果を示した項目

▽ フロア効果を示した項目

次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .45以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。その結果、この4因子は第I因子から第IV因子まで、それぞれ「長文読解」因子、「授業取り組み」因子、「漢字・問題集中心」因子、「意味調べ」因子と命名された。

4.2 調査2 :

調査2で扱った40項目のうち、表2に示した平均、標準偏差から、天井効果、フロア効果を示した10目を削除した後、30項目を基に因子分析を実施した結果、4因子18項目が抽出された。

表2 : 調査2の平均・標準偏差(N=139)

| 項目 | X | SD | 項目 | X | SD |
|-----------------|------|------|-----------------|------|------|
| 1 | 3.35 | 1.17 | 21 [△] | 4.12 | 0.93 |
| 2 | 3.59 | 1.36 | 22 [△] | 4.12 | 1.01 |
| 3 | 3.78 | 0.97 | 23 | 3.24 | 1.27 |
| 4 | 3.70 | 1.00 | 24 [△] | 4.15 | 0.95 |
| 5 | 3.21 | 1.21 | 25 | 3.20 | 1.12 |
| 6 | 3.09 | 1.13 | 26 | 2.50 | 0.99 |
| 7 | 3.58 | 1.22 | 27 | 3.43 | 1.08 |
| 8 | 2.18 | 0.93 | 28 | 3.37 | 1.12 |
| 9 | 3.63 | 1.12 | 29 [△] | 4.14 | 0.82 |
| 10 | 3.06 | 1.12 | 30 [△] | 4.13 | 0.91 |
| 11 | 2.94 | 1.19 | 31 | 3.45 | 1.10 |
| 12 | 3.36 | 1.27 | 32 | 3.18 | 1.21 |
| 13 | 3.27 | 1.19 | 33 [△] | 4.17 | 0.85 |
| 14 | 2.71 | 1.09 | 34 [△] | 4.22 | 0.91 |
| 15 | 2.06 | 0.98 | 35 | 3.22 | 1.10 |
| 16 [△] | 4.28 | 0.72 | 36 [△] | 4.61 | 0.63 |
| 17 | 3.41 | 1.10 | 37 | 3.42 | 1.08 |
| 18 | 3.27 | 1.18 | 38 | 3.36 | 1.15 |
| 19 [▽] | 1.60 | 0.94 | 39 | 4.17 | 0.79 |
| 20 | 2.93 | 1.03 | 40 | 3.19 | 1.04 |

△ 天井効果を示した項目

▽ フロア効果を示した項目

次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .45以上の因

子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。その結果、この4因子は第I因子から第IV因子まで、それぞれ「国語学習方法」因子、「学習計画」因子、「長文読解」因子、「漢字・問題集」因子と命名された。

以上の結果をみると、本調査の対象者である高校生、大学生が国語学習において用いている学習方略は、「長文読解」と「漢字・問題集」を中心としている点では、共通していた。その一方高校生が授業を重視し、意味調べに力点をおいているが、大学生は国語学習の方法や、学習計画を重視していることが明らかになった。

参考文献：

- 北條礼子(1996)「日本人EFL学習者の学習方略に関する研究(1)」
上越教育大学研究紀要 第16巻 第1号 185～196頁
(1997a)「日本人EFL学習者の学習方略に関する研究(2)」
上越教育大学研究紀要 第16巻 第2号 583～596頁
(1997b)「日本人EFL学習者の学習方略に関する研究(3)」
上越教育大学研究紀要 第17巻 第1号 269～281頁

[本研究は、平成9～10年度科学研究補助金基盤研究C「日本人学習者の言語(国語・英語)学習における学習方略のモデル構築に関する研究」の成果の一部である。]

資料

日本人 E F L 学習者の英語学習方略に関する研究 (1) 80 - 90

日本人 E F L 学習者の英語学習方略に関する研究 (2) 91 - 101

日本人EFL学習者の学習方略に関する研究(1)

1. 研究の背景

外国語(英語)教育の分野において、伝統的に教師側からの研究アプローチが多く、指導方法の工夫・改善や教材の提示方法が研究のテーマとなってきた。しかし、国内では1980年代に入ると、教育目標として自己教育力の伸張と個人差に応じた教育の推進が掲げられ、学習者個人個人の特性を明らかにすると同時に英語の学習成果の向上を目指すようになった。

ところで、言語学習における学習者特性の捉え方は多岐多様ではあるがSkehan(1989)は個人差という観点から、学習方略、学習スタイル、適性、動機付けをとりわけ重要な学習者特性であると指摘している。最近、外国語教育の分野における国内外の諸研究をみると、学習方略一般ばかりではなく、リーディング、リスニングまたはコミュニケーションなどの範囲を限定した上でのさまざまな方略に関する研究が盛んである。しかし、国内での研究で用いられている調査票は、Oxford(1990)のStrategy Inventory for Language Learning(Ver. 7.0)に代表されるように、欧米で開発された調査票の翻訳版である(Watanabe, 1991)。つまり、現在までのところ、日本人EFL学生の英語学習における学習方略を包括的に調査する調査票が開発されている段階には致っていないと考えられる。このような状況の下、日本人EFL学習者の学習方略研究にあたり、まず急務であると考えられる課題は、研究対象者に合った学習方略の調査項目の選定であろう。

2. 研究の目的

本研究における第一の目的は、これまで欧米で英語学習に対する態度を調べる項目として紹介されている調査項目を用いて、日本人EFL学習者の英語学習に対する態度を検討することである。第二の目的は、今回用いた調査項目が、日本人EFL学習者の学習方略を調べるための調査票を開発する資料として適当な項目であるかどうかを検討することである。

3. 研究の方法

1)対象者： 国立大学1年生199名

2)測定具： 以下に示す3部から構成されるアンケート：

Politzer & McGroarty(1985)が用いた調査項目を参考にし、筆者が日本人学習者が被験者であることを念頭において翻訳して作成したアンケート。日本語表現については、英語の現職教員2名に内容が理解しに

くい表現について指摘を受け、修正した。

アンケートの構成は以下のとおりである。

- 1) 英語の授業中の態度に関する14項目
- 2) 自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目
- 3) 授業以外の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目

3) 調査実施時期： 1994年4月

4) 手続き： 約20分の実施時間で、集団調査を行った。本研究で扱う部分について述べると、回答形式は5部～7部は「1. まったくそうしない、2. めったにそうしない、3. どちらでもない、4. ときどきそうする、5. いつもそうする」の5段階であり、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

5) 分析方法： 因子分析

4. 研究の結果

4.1 英語の授業中の態度に関する14項目

① 平均値・標準偏差

英語の授業中の態度に関する14項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は各項目の平均と標準偏差を示したものである。平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を項目8が越えていたが、その内容が、日本人EFL学習者に特有なものであると判断したので、今回は因子分析の対象からはずさないこととした。

② 因子分析

英語の授業中の態度に関する14項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その結果として、再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に3因子の解釈に辿り、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表2に示すとおりである。因子の解釈にあたり、基本方針として、表2の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。

表 1 : 英語の授業中の態度に関する14項目の評定得点の平均と標準偏差 (N = 199)

| 項目 | | 平均値 | S D |
|----------------|---|------|------|
| 1 | 他の学生が間違ったと気付いたら頭の中で自分で正しい答えを言ってみる | 4.08 | 0.66 |
| 2 | 先生があなたを指名しなくても頭の中で答えを言ってみる | 4.12 | 0.72 |
| 3 | 話し手の動作や表現から文の意味を推測する | 3.82 | 0.96 |
| 4 | もし先生の言っていることが理解できなかつたらもう一度言ってくれるように頼む | 3.02 | 1.18 |
| 5 | 文や語句が習った文法の例であるかどうか先生に質問する | 2.33 | 0.84 |
| 6 | 自分が間違ったと気付いたら自分のしていることを中断する | 3.59 | 0.83 |
| 7 | 先生に質問すると授業を中断させるので、自分で分らない語句を繰り返したりして勉強する | 3.21 | 0.83 |
| 8 [△] | 日本語でクラスメートに話しかける | 4.64 | 0.72 |
| 9 | もし授業中許されていればクラスメートの間違いを訂正する | 2.51 | 0.98 |
| 10 | 例文や見聞きして自分が知っていると思う規則について推測することは避ける | 2.79 | 0.63 |
| 11 | ある規則について例外があることに気付いたら、先生に説明を求める | 3.16 | 1.02 |
| 12 | ある表現がいつ誰によって用いられるのかについて先生にたずねる | 2.36 | 0.88 |
| 13 | 正解であると確信がもてる時だけ質問に答える | 3.43 | 0.93 |
| 14 | 知らない新出単語があつたら、それが用いられている文全体からその意味を推測する | 4.02 | 0.87 |

△ 天井効果と判断された項目

表 1、2 より、項目の内容をみると、まず因子 I には項目 5、12、11、4、9 の 5 因子が含まれていた。因子 I の項目内容をみるとほとんどが、教師に質問する内容であったので、「教師への積極的質問」と命名した。次に、因子 II は項目 2、1、14、3 の 4 因子が示すように、頭の中で意味を推測する態度を示していると考えられるので、「意味の推測」と命名した。

また、因子 III には項目 6、7、8、13 の 4 因子が含まれていた。このうち因子 8 は、英語の授業中日本語でクラスメートに話しかける、という英語を用いることを避けるともいえる態度であるが、その他の項目は、自分が質問すると授業を中断させるので、自分で分らない語句を繰り返したりして勉強する、という周囲への配慮であり、また正解であると確信がもてる時だけ質問に答えると言う、遠慮したり、自分の行動に対して慎重な傾向を説明していると考えられるので、「慎重な配慮」と命名した。最後に、以上の因子に含まれない項目があつたが、それは項目 10 の「例文や見聞きして

自分が知っていると思う規則について推測することはを避ける」というものであった。

表 2 : バリマクス回転後の因子パターン (英語の授業中の態度)

| | 因子 I | 因子 II | 因子 III | 共通性 |
|-------|---------|---------|---------|--------|
| 項目 5 | 0.7522 | -0.0279 | 0.2285 | 0.6188 |
| 項目 12 | 0.7188 | -0.0034 | -0.0627 | 0.5207 |
| 項目 11 | 0.6964 | 0.0972 | -0.0271 | 0.4951 |
| 項目 4 | 0.5793 | 0.2312 | -0.1166 | 0.4027 |
| 項目 9 | 0.5366 | 0.1874 | -0.1984 | 0.3625 |
| 項目 2 | 0.1246 | 0.7423 | 0.0328 | 0.5676 |
| 項目 1 | 0.1019 | 0.7100 | 0.0283 | 0.5153 |
| 項目 14 | 0.0236 | 0.5908 | 0.0757 | 0.3552 |
| 項目 3 | 0.3037 | 0.5641 | -0.0998 | 0.4204 |
| 項目 6 | 0.0003 | 0.2888 | 0.7233 | 0.6066 |
| 項目 7 | 0.0224 | -0.0694 | 0.6405 | 0.4156 |
| 項目 8 | -0.1234 | 0.2307 | 0.5817 | 0.3615 |
| 項目 13 | -0.0998 | 0.2307 | 0.4105 | 0.2317 |
| 項目 10 | 0.0338 | -0.2318 | 0.2983 | 0.1439 |
| 説明分散 | 2.3365 | 2.0243 | 1.6568 | 6.0175 |

(注) 網かけされた数値は 0.40 以上。

4.2 自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目

① 平均値・標準偏差

自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目の得点をそれぞれ集計し、平均値と標準偏差を求めたものが表3である。平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を項目5、項目14、項目15が越えていたが、今回の調査ではなるべく広い範囲で調査項目を検討することが調査の目的であり、数値も大きく得点範囲を越えていないことから、因子分析の対象からはずさないこととした。

② 因子分析

自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その結果として、再度3因子解を仮定した反復主因子法を

実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に3因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表4に示すとおりである。因子の解釈にあたり、基本方針として、表4の回転後の因子パターンにおいて絶対値 .40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。

表3：自分一人で英語を勉強しているときの態度に関する15項目 (N=199)

| 項目 | 平均値 | S D |
|---|------|------|
| 1 単語や語句を勉強するとき、自分自身で実際に口に出して 言ってみる | 3.96 | 1.01 |
| 2 長文を読んでいるとき、知らない単語の意味を辞書で引く 前に、文全体の意味を考えてみる | 3.83 | 1.00 |
| 3 英語と日本語の違いを考え、その結果として間違わずにす むことがある | 2.85 | 0.82 |
| 4 文章は文法の規則で分析せずにできるだけそのまま暗記する | 2.79 | 0.99 |
| 5 [△] 辞書で単語をよく引く | 4.32 | 0.83 |
| 6 辞書で単語を引くときその語が使われている例文をいつも見る | 3.68 | 1.08 |
| 7 辞書で単語を引いたらその語を口に出して発音してみる | 3.49 | 1.19 |
| 8 長文を読むとき、全体を読む前にわからない単語の意味を 調べてその意味を長文の横に書く | 3.21 | 1.28 |
| 9 自分自身の発音を注意深く聞いて、直そうと努力する | 3.10 | 1.09 |
| 10 意味や発音などにより、単語をグループ化することで単語 を暗記する | 2.45 | 1.04 |
| 11 これまで勉強した単語を、単語カードや単語リストを用い ることにより整理している | 2.49 | 1.16 |
| 12 単語や語句を暗記するとき、英語の他の単語・語句や絵・ 行動というより、日本語と関連づける | 3.19 | 1.04 |
| 13 授業で聞き逃した単語や文法について、授業以外の時間に 勉強したり、練習する | 3.34 | 0.94 |
| 14 [▽] 自分に向って英語で話してみる | 1.73 | 0.86 |
| 15 [▽] 自分がしている行動や自分が見た物について英語で説明で きるかどうか時々試してみる | 1.97 | 0.99 |

[△] 天井効果と判断された項目

[▽] フロア効果と判断された項目

表4：バリマクス回転後の因子パターン（自分一人で英語を勉強しているときの態度）

| | 因子Ⅰ | 因子Ⅱ | 因子Ⅲ | 共通性 |
|------|---------|---------|---------|--------|
| 項目15 | 0.7782 | -0.0199 | 0.0463 | 0.6082 |
| 項目14 | 0.7697 | -0.0876 | 0.0273 | 0.6009 |
| 項目9 | 0.7151 | 0.2458 | 0.0455 | 0.5738 |
| 項目7 | 0.4814 | 0.3896 | -0.2958 | 0.4711 |
| 項目10 | 0.3800 | 0.0990 | -0.0097 | 0.1543 |
| 項目5 | -0.0966 | 0.7171 | 0.0187 | 0.5239 |
| 項目13 | 0.1957 | 0.6411 | 0.0977 | 0.4588 |
| 項目11 | 0.0448 | 0.6284 | -0.0926 | 0.4054 |
| 項目6 | 0.1681 | 0.5416 | 0.0239 | 0.3222 |
| 項目8 | 0.1051 | 0.2143 | 0.6257 | 0.4485 |
| 項目4 | -0.0237 | -0.0194 | 0.5688 | 0.3245 |
| 項目12 | 0.1531 | 0.1998 | 0.4210 | 0.2406 |
| 項目3 | 0.3436 | 0.1490 | -0.3585 | 0.2688 |
| 項目1 | 0.3368 | 0.0936 | -0.3677 | 0.2574 |
| 項目2 | 0.1130 | 0.2766 | -0.6416 | 0.5009 |
| 説明分散 | 2.4428 | 2.0371 | 1.6793 | 6.1592 |

（注）網かけされた数値は|0.40|以上。

表3、4より、項目の内容をみると、因子Ⅰには項目15、14、9、7の4因子が含まれていたが、項目内容はすべて英語を勉強するとき、英語を口に出してみるといふ、音声化に関する内容であったので、「音声化学習」と命名した。

次に、因子Ⅱは項目5、13、11、6の4因子が含まれていた。項目内容をみると、英単語を学習するときに辞書を引いたり、単語カードなどを利用するという英単語学習に関する内容であったことから、「英単語辞書引き学習態度」と命名した。また、因子Ⅲには項目8、4、12、2の4因子が含まれていた。この4項目のうち、項目2は項目内容が逆に解釈されるため、結局項目8、12、2の3項目は英単語や文を日本語の意味と直接結びつけ、項目4が英文をそのまま暗記する態度であったが、因子Ⅲが項目8、4を強く支配するとの知見から、「日本語の意味利用」と命名した。最後に、因子に含まれなかった項目をみると、項目10、3、1であった。項目内容から、明らかになったことは、単語や語句を勉強するとき口に出してみたり、わざわざ意味や発音によるグループ化をして暗記する傾向や、英語と日本語の違いを考えながら勉強する傾向はみられない、ということであった。

4.3 授業以外の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目

① 平均値・標準偏差

授業以外の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目の得点をそれぞれ集計し、平均値と標準偏差を求めたものが表5である。項目4が天井効果を示していたが、なるべく広い範囲で調査項目を検討することが調査の目的であり、数値も大きく得点範囲を越えていないことから、因子分析の対象からはずさないこととした。また、平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を越えていた項目は、他になかったので、結局全項目を因子分析に持と込むことにした。

表5：授業以外の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目 (N=199)

| 項目 | 平均値 | S D |
|---|------|------|
| 1 ある考えを英語でどのように表現してよいかわからないとき、先生や友人に助けを求める | 3.74 | 0.96 |
| 2 自分の言うことを相手がわからないとき、自分の言ったことを別の言い方で試してみる | 3.52 | 0.97 |
| 3 自分の言ったことが文法的に正しいかどうかわからないとき、他の人に確認する | 3.82 | 0.88 |
| 4 [△] 自分が間違っていると気付いたら自分の間違いを訂正する | 4.25 | 0.75 |
| 5 相手の言っていることがわからなかったら、相手にもう一度繰り返してくれるように頼む | 4.11 | 0.82 |
| 6 たとえわからなくても、わかっているフリをする | 3.03 | 1.00 |
| 7 暗記した文章を、会話のとき使う | 2.77 | 1.01 |
| 8 顔や体の表現やジェスチャーから、相手の言っている意味を推測することがよくある | 3.71 | 0.88 |
| 9 他の人に話しているとき、自分の使っている表現や文が、勉強した規則に合っていることに気付く | 2.97 | 0.87 |
| 10 英語で間違えより黙っている方が賢明だと感じる時々ある | 3.02 | 0.99 |
| 11 会話を続けるのに、これまで勉強したり暗記した文を使うことがある | 3.25 | 0.98 |
| 12 新しい語句や文を勉強しているとき、それまで習った文法の規則に合わないようだと思うことがある | 3.39 | 0.78 |
| 13 英語で何かを言おうとするとき、たいてい、言いたいことをまず日本語で考え、それから英語になおす | 4.17 | 0.81 |
| 14 言いたいことがうまく相手に伝わらないとき、ジェスチャーを用いる | 4.05 | 0.89 |

| | | | |
|----|---|------|------|
| 15 | 外国語で話すという精神的苦痛のため、自分を英語を用いる状況におくことを避ける | 3.40 | 0.99 |
| 16 | 相手が自分の発音を理解しなかったら、相手がわからなかった単語や語句のスペルをいう | 3.55 | 0.97 |
| 17 | 会話をするとき、授業で習ったばかりの単語や文章を使ってみることがよくある | 3.05 | 0.95 |
| 18 | パーティなど人との集りに参加するとき、可能な限り、日本語を話す人と話そうとする | 3.68 | 0.87 |
| 19 | 英語の勉強になるから、という目的で映画を見る | 2.42 | 1.12 |
| 20 | 英語の勉強になるから、という目的でテレビやビデオをみる | 2.47 | 1.12 |
| 21 | 英語の勉強になるから、という目的でラジオを聞く | 2.23 | 1.09 |
| 22 | 英語で何かを言おうとするとき、英語で既に知っている文章をまず考え、それから状況に合うように必要なら修正する | 3.29 | 0.92 |
| 23 | 英語を練習するという目的で、誰かと話しをしたことがある | 2.51 | 1.18 |
| 24 | 自分の好きな話題や使いたい表現が使える会話に意図的にもっていったことがある | 2.50 | 0.98 |

△ 天井効果と判断された項目

② 因子分析

授業以外の場で英語を勉強するときの態度に関する24項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果として、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈に切り、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表6に示すとおりである。因子の解釈にあたり、基本方針として、表6の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。表5、6より、項目の内容をみると、因子Iは項目7、11、24、9、17、23、12の7因子が示すように、学習した英文を有効にかつ積極的に用いてコミュニケーションを図ろうとする学生の態度を示すものと考えられる。従って、「学習成果積極利用」と命名した。

次に、因子IIは項目2、14、13、16、4、5、8の8因子が示すように、人と関わりながら、自分の意図が英語でうまく相手に伝わらない場合でも工夫して、相手とコミュニケーションをしようとする「積極的工夫の態度」と命名した。また、因子IIIは項目20、19、21から明らかのように英語学習のために、テレビ、ビデオ、映画、ラジオを利用するという態度を示しているので、「メディア利用」と命名した。さらに、因子IVであるが、因子15、18、6、10、13が含まれたが、英語で話すことが苦痛な場合、そのような機会を避けるという態度を示していると思われる、「コミュニケー

ション回避」と命名した。最後に、以上の因子に含まれなかった項目があったが、項目22であった。項目22の内容は、「英語で何かを言おうとするとき、英語で既知っている文章をまず考え、それから状況に合うように必要なら修正する」というものである。

表6：バリマクス回転後の因子パターン（授業以外の場で英語を勉強するときの態度）

| | 因子 I | 因子 II | 因子 III | 因子 IV | 共通性 |
|------|---------|---------|---------|---------|--------|
| 項目 7 | 0.8091 | 0.0331 | 0.0352 | -0.0870 | 0.6645 |
| 項目11 | 0.7522 | 0.1261 | 0.0980 | -0.0244 | 0.5918 |
| 項目24 | 0.6377 | 0.0760 | -0.0020 | -0.0837 | 0.4195 |
| 項目 9 | 0.5778 | 0.2803 | -0.0657 | -0.0559 | 0.4199 |
| 項目17 | 0.5766 | 0.1523 | 0.1878 | -0.1038 | 0.4018 |
| 項目23 | 0.4981 | 0.1412 | 0.2601 | -0.3143 | 0.4345 |
| 項目12 | 0.4247 | 0.1001 | -0.0465 | 0.1977 | 0.2316 |
| 項目22 | 0.3704 | 0.0083 | 0.0075 | 0.1412 | 0.1572 |
| 項目 2 | 0.0755 | 0.6917 | 0.0052 | -0.1752 | 0.5148 |
| 項目14 | -0.0497 | 0.5885 | 0.0232 | -0.0610 | 0.3531 |
| 項目 1 | 0.0843 | 0.5738 | -0.0168 | 0.1522 | 0.3598 |
| 項目 3 | 0.2547 | 0.5559 | 0.0073 | 0.3360 | 0.4869 |
| 項目16 | 0.1661 | 0.5336 | 0.0555 | -0.0889 | 0.3232 |
| 項目 4 | 0.1114 | 0.5330 | -0.0727 | 0.2327 | 0.3560 |
| 項目 5 | 0.1766 | 0.5320 | 0.0136 | -0.0363 | 0.3157 |
| 項目 8 | 0.0592 | 0.5299 | 0.1753 | -0.1349 | 0.3332 |
| 項目20 | 0.0670 | 0.0423 | 0.9244 | 0.0014 | 0.8608 |
| 項目19 | 0.0679 | -0.0057 | 0.9157 | -0.0492 | 0.8455 |
| 項目21 | 0.0720 | 0.0768 | 0.7927 | -0.1213 | 0.6541 |
| 項目15 | -0.3289 | 0.0981 | -0.0081 | 0.7072 | 0.6180 |
| 項目18 | 0.0557 | -0.0617 | -0.1799 | 0.6104 | 0.4118 |
| 項目 6 | 0.0789 | -0.0543 | -0.0454 | 0.5357 | 0.2983 |
| 項目10 | -0.0450 | -0.1571 | -0.0001 | 0.5257 | 0.3030 |
| 項目13 | -0.0003 | 0.1764 | 0.0328 | 0.5107 | 0.2930 |

説明分散 3.1477 2.8301 2.5173 2.1528 10.6479

(注) 網かけされた数値は 0.40 以上。

5 研究の考察

5.1 英語の授業中の態度について

英語の授業中の態度についてのそれぞれの因子が解釈された内容を一覧すると、以下のようになった。

- 因子Ⅰ：教師への積極的質問
- 因子Ⅱ：意味の推測
- 因子Ⅲ：慎重な配慮

つまり、学習者の英語の授業中の特徴的な態度として指摘できるのは、わからないことや確かめたいことがあったら教師に説明を求めること、頭の中で意味を推測すること、周囲の邪魔になることを気にすること、英語を用いるのをためらったり、避けたりすることであることがわかった。以上から、英語の授業のとき、頭の中で英語の意味を考えるなど、周囲の邪魔にならないように配慮しながらも、必要とあれば教師に質問する学習者の姿が感じられる。

5.2 自分一人で英語を勉強しているときの態度について

自分一人で英語を勉強しているときの態度についてのそれぞれの因子が解釈された内容を一覧すると、以下のようになった。

- 因子Ⅰ：音声化学習
- 因子Ⅱ：英単語辞書引き学習態度
- 因子Ⅲ：日本語の意味利用

つまり、英語を一人で勉強するときの典型的学習態度として指摘できるのは、英単語を辞書でよく引いて、その際その単語を口に出して発音してみること、また単語カードなどを利用したり、日本語の意味と結びつけて単語を暗記することであった。ここでこの3因子の共通点を考えると、単語学習に重点がおかれていることであろう。日本人は英文読解学習においてボトムアップ処理が多いことが実証的にも確かめられているが(Iijima, 1993)、このことを支持する結果であると考えられる。

5.3 授業以外の場で英語を勉強するときの態度について

授業以外の場で英語を勉強するときの態度についてのそれぞれの因子が解釈された内容を一覧すると、以下のようになった。

- 因子Ⅰ：学習成果積極利用

- 因子Ⅱ：積極的工夫の態度
- 因子Ⅲ：メディア利用
- 因子Ⅳ：苦痛を伴う英語使用

つまり授業以外の場で英語を勉強するときに特徴的な態度として指摘されたのは、学習した英文を有効にかつ積極的に用いてコミュニケーションを図ろうとしたり、自分の意図が英語でうまく相手に伝わらない場合でも何とか工夫して相手とコミュニケーションをしようとする、積極的な態度であることが明らかになった。さらに、英語学習のために、テレビ、ビデオ、映画、ラジオを利用することも示された。しかし、その反面、英語で話すことが苦痛な場合、そのような機会を避けるという傾向があることを示していた。以上に共通するのは、英語で話すことを苦痛であると感じながらも、メディアを利用して英語を勉強し、相手がある場合は工夫をこらして積極的にコミュニケーションしようという態度であると考えられる。

5.4 本研究で用いた調査項目について

最後に、本研究で用いた調査項目から日本人EFL学習者の学習方略を調べるための項目を選定するにあたり、まず削除すべき項目について検討する。

第一に、英語の授業中の態に関する14項目のうち、因子に含まれない項目は1項目あったが、それは項目10の「例文や見聞きして自分が知っていると思う規則について推測することは避ける」という内容であった。次に、一人で英語を勉強するときの態度に関する15項目のうち因子に含まれなかった項目をみると、項目10、3、1の3項目であった。項目内容から、明らかになったことは、単語や語句を勉強するとき口に出してみたり、わざわざ意味や発音によるグループ化をして暗記する傾向や、英語と日本語の違いを考えながら勉強する傾向はみられない、ということであった。最後に、授業以外の場で英語を勉強するときの態度について因子に含まれなかった項目があったが、項目22の1項目であった。項目22の内容は、「英語で何かを言おうとするとき、英語で既に知っている文章をまず考え、それから状況に合うように必要なら修正する」というものである。

以上の削除すべき項目内容をみると、単語や語句を勉強すると意味や発音など自ら単語をグループ化することや、英語と日本との違いを考えてみたり、また英語で何か言おうとするときにでも英語をまず考えてそれを修正したり工夫したりする、といういわば自分で考えてみたり工夫したり、という積極的に工夫する態度に関する内容であると考えられる。

最後に、ここであげられた項目以外は、日本人EFL学習者の学習方略を調査するための項目として用いることができるものと判断された。

引用文献

- Iijima, H. 1993. A Study on the Effects of Pre-Reading Activities on EFL Reading Comprehension. Unpublished MA Thesis. Joetsu Univerisy of Education.
- Oxford, R.L. 1990. Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know. Heinle & Heinle Publishers.
- Politzer, R.L. & McGroarty, M. 1985. An Exploratory Study of Learning Behavior and Their Relationship to Gains in Linguistic and Communicative Competence. TESOL Quarterly, 19, 1, 103-124.
- Skehan, P. 1989. Individual Differences in Second-Language Learning. Edward Arnold.
- Watanabe, Y. 1991. Classification of Language Learning Strategies. International Christian University Language Research Bulletin, 6, 75-102.

日本人EFL学習者の学習方略に関する研究(2)

1. 研究の背景

第2言語習得の分野では、方略は、学習方略とコミュニケーション方略の2種類に大別されて扱われてきた。コミュニケーション方略は、私たちが意味をいかに生産的に表現するか、他にメッセージをいかに伝達するか、という出力に関係している。一方、学習方略は、処理、貯蔵、検索という、他からメッセージを取り込むという、入力に関係している(Brown:1995, 114~118)。国内における学習方略に関する研究をみると、Oxford(1990)が開発したSILL(Strategy Inventory for Language Learning: Ver. 7.0)に代表されるように、欧米で開発された調査票の翻訳版であることが多く、必ずしも日本人EFL学習者に適しているというわけではない(Watanabe, 1991)。言い換えると、現在まで日本人EFL学生が英語学習において用いている学習方略を対象とした包括的な調査項目が用いられていないと考えられる。筆者は本研究に先立ち、研究対象者に合った学習方略の調査項目の選定を目標に据え、その第一歩として、Politzer & McGroarty(1985)が用いた調査項目が日本人学習者に適しているかどうかについて検討した。その結果、対象とした53項目のうち5項目が不適當であることが明らかになった。さらに、彼らの調査項目をSILLの50項目と比較検討すると、内容が重複している項目としていない項目があり、後述の50項目のうちにも必ずしも日本人学習者に適當ではないと判断される項目も見受けられた。そこで、なるべく多角的な角度から調査項目を最終的に選定するため、先回の調査結果を踏まえ、SILLの項目を基に、新たに調査項目を加えた上で、日本人EFL学習者のための調査項目を検討することが必要であると考えられた。

2. 研究の目的

本調査の目的は、日本人EFL学習者の学習方略を調べるための調査項目を選定することである。ここで検討する対象となる項目は、①R. Oxfordが開発した50項目、②予備調査1において検討した項目のうちで前述の50項目と内容の重ならない19項目、③大学1年生を対象とした自由記述形式のアンケートにより、筆者が収集したデータを参考に作成した項目と、④他の先行研究から採用した項目、⑤筆者が考案した項目とを加え、合計100項目から成る調査項目である。

3. 研究の方法

- 1)対象者： 国立大学1年生189名
- 2)測定具： 100項目から成る5段階尺度形式のアンケート： その内訳は、

- 1) Oxfordが 開発したthe Strategy Inventory for Language Learning (SILL) Version 7.0 (ESL/EFL) の50項目、
- 2) 予備調査1で検討して日本人を対象とした質問項目として適当であると判断された、Politzer & McGroarty (1985) が用いた52の質問項目のうち、SILLと内容が重複しない19項目、
- 3) 筆者が1995年2月に大学1年生50名を対象とし実施した自由記述式アンケートの結果を参考に作成した10項目、
- 4) 国内の先行研究 (Ogino, 1995; Iijima, 1996) から採用した4項目、
- 5) 筆者が考案した17項目である。

なおSILLの質問項目は筆者が日本人学習者が被験者であることを念頭において翻訳し、その他の50項目と併せて日本語表現について、英語の現職教員2名に、内容が理解しにくい表現について指摘を受け、必要な箇所を修正した。

3) 調査実施時期： 1996年4月

4) 手続き： 約30分の実施時間で、集団調査を行った。本研究で扱う部分について述べると、回答形式は5部～7部は「1. まったくそうしない、2. めったにそうしない、3. どちらでもない、4. ときどきそうする、5. いつもそうする」の5段階であり、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

5) 分析方法： 因子分析

4. 研究の結果

① 平均値・標準偏差

英語学習における態度、学習方略に関する100項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は各項目の平均と標準偏差を示したものである。

以上の100項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を越えた項目として、まず項目51、項目60、項目75、項目76、項目79の計5個の質問項目を天井効果が生じたものと判断し因子分析に持ち込まなかった。同様に、項目7、項目17、項目30、項目43、項目48、項目62、項目67、項目70、項目73、項目87、項目90の計10個の質問項目をフロア効果が生じたものと判断し、因子分析に持ち込まなかった。

② 因子分析

英語学習における学習方略に関する100項目の得点について、天井効果とフロア効果を示した計15項目を削除した後の85項目の得点について、共通性の初期値をSM

Cとした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて5因子解を適当と判断した。その結果として、再度5因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に5因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンはを表2に示すとおりである。

表1:各質問項目の評定得点の平均と標準偏差 (N=189)

| 項目 | Mean | SD | 項目 | Mean | SD | 項目 | Mean | SD | 項目 | Mean | SD |
|-----------------|------|--------|-----------------|------|--------|-----------------|------|--------|-----------------|------|--------|
| 1 | 3.23 | (1.02) | 26 | 3.47 | (1.10) | 51 | 2.72 | (1.08) | 76 [△] | 4.17 | (0.95) |
| 2 | 3.08 | (1.09) | 27 | 2.76 | (1.18) | 52 [△] | 4.42 | (0.79) | 77 | 4.13 | (0.84) |
| 3 | 3.23 | (1.16) | 28 | 2.04 | (0.94) | 53 | 3.20 | (1.00) | 78 | 3.61 | (1.25) |
| 4 | 2.85 | (1.11) | 29 | 3.43 | (1.09) | 54 | 3.13 | (1.22) | 79 [△] | 4.11 | (1.05) |
| 5 | 2.87 | (1.15) | 30 [▽] | 1.72 | (0.96) | 55 | 3.30 | (1.16) | 80 | 3.24 | (1.33) |
| 6 | 2.78 | (1.24) | 31 | 3.48 | (1.10) | 56 | 3.65 | (1.22) | 81 | 3.94 | (0.94) |
| 7 [▽] | 1.88 | (1.08) | 32 | 3.10 | (1.19) | 57 | 2.79 | (1.10) | 82 | 3.68 | (1.09) |
| 8 | 2.96 | (1.02) | 33 | 3.49 | (1.05) | 58 | 3.28 | (1.06) | 83 | 3.90 | (1.02) |
| 9 | 2.29 | (1.12) | 34 | 2.92 | (1.12) | 59 | 3.66 | (1.19) | 84 | 2.05 | (1.12) |
| 10 | 3.86 | (1.16) | 35 | 1.84 | (0.82) | 60 [△] | 4.15 | (0.99) | 85 | 3.38 | (1.26) |
| 11 | 2.86 | (1.13) | 36 | 2.00 | (0.97) | 61 | 3.72 | (1.06) | 86 | 1.86 | (0.91) |
| 12 | 3.20 | (1.13) | 37 | 2.74 | (1.17) | 62 [▽] | 1.99 | (1.12) | 87 [▽] | 1.49 | (0.86) |
| 13 | 2.61 | (1.00) | 38 | 2.22 | (0.87) | 63 | 1.93 | (1.25) | 88 | 2.79 | (1.25) |
| 14 | 2.04 | (0.89) | 39 | 2.98 | (1.15) | 64 | 2.83 | (0.95) | 89 | 2.15 | (1.14) |
| 15 | 2.02 | (1.12) | 40 | 2.67 | (1.14) | 65 | 1.96 | (0.95) | 90 [▽] | 1.93 | (1.03) |
| 16 | 2.01 | (1.01) | 41 | 3.20 | (1.26) | 66 | 2.09 | (1.03) | 91 | 2.38 | (0.97) |
| 17 [▽] | 1.83 | (0.94) | 42 | 2.87 | (1.19) | 67 [▽] | 1.85 | (1.15) | 92 | 3.23 | (1.01) |
| 18 | 3.54 | (1.18) | 43 [▽] | 1.25 | (0.52) | 68 | 3.57 | (1.34) | 93 | 3.99 | (0.97) |
| 19 | 3.46 | (1.08) | 44 | 2.78 | (1.18) | 69 | 1.85 | (1.18) | 94 | 3.00 | (1.18) |
| 20 | 3.24 | (1.08) | 45 | 3.75 | (1.09) | 70 [▽] | 1.85 | (1.04) | 95 | 2.97 | (1.05) |
| 21 | 3.91 | (1.01) | 46 | 2.03 | (1.02) | 71 | 2.95 | (1.27) | 96 | 2.59 | (0.92) |
| 22 | 3.01 | (1.11) | 47 | 2.05 | (1.03) | 72 | 3.68 | (1.05) | 97 | 3.29 | (1.17) |
| 23 | 2.85 | (1.08) | 48 [▽] | 1.93 | (0.99) | 73 [▽] | 1.68 | (0.79) | 98 | 3.68 | (1.01) |
| 24 | 3.66 | (0.95) | 49 | 2.45 | (1.38) | 74 | 3.08 | (1.22) | 99 | 3.71 | (1.00) |
| 25 | 3.59 | (1.13) | 50 | 2.72 | (1.08) | 75 [△] | 4.20 | (0.93) | 100 | 3.23 | (1.07) |

△ 天井効果と判断された質問項目

▽ フロア効果と判断された質問項目

表 2 : バリマクス回転後の因子パターン (英語学習における態度、学習方略)

| | 因子 I | 因子 II | 因子 III | 因子 IV | 因子 V | 共通性 |
|--------------------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|
| 項目 35 | 0.7023 | 0.2689 | -0.0637 | 0.1465 | -0.0124 | 0.5911 |
| 項目 86 | 0.6984 | -0.0142 | 0.0320 | 0.0814 | -0.0386 | 0.4971 |
| 項目 36 | 0.6863 | 0.0967 | 0.0623 | 0.2772 | 0.0661 | 0.5654 |
| 項目 28 | 0.5308 | 0.2254 | 0.0380 | 0.1720 | -0.1643 | 0.3905 |
| 項目 46 | 0.5199 | 0.2362 | 0.0877 | -0.0466 | -0.0798 | 0.3423 |
| 項目 50 | 0.5021 | 0.1070 | 0.2739 | 0.3025 | -0.0145 | 0.4303 |
| 項目 14 [◇] | 0.4983 | 0.4662 | 0.1989 | 0.1678 | -0.1628 | 0.5598 |
| 項目 16 | 0.4948 | 0.2408 | 0.1009 | 0.3423 | -0.0879 | 0.4379 |
| 項目 65 | 0.4886 | 0.3299 | -0.0724 | 0.0768 | 0.1920 | 0.3957 |
| 項目 37 | 0.4829 | -0.0565 | 0.3667 | 0.2858 | -0.1274 | 0.4688 |
| 項目 91 | 0.4695 | 0.3684 | 0.2151 | -0.0064 | 0.0958 | 0.4252 |
| 項目 89 | 0.4574 | 0.4415 | 0.2316 | 0.0197 | 0.0774 | 0.4641 |
| 項目 38 | 0.4521 | -0.0079 | 0.3696 | -0.0294 | -0.0652 | 0.3461 |
| 項目 66 | 0.4464 | 0.3626 | 0.0757 | 0.1118 | -0.1756 | 0.3797 |
| 項目 32 | 0.4458 | -0.2090 | 0.2492 | 0.4317 | -0.0600 | 0.4945 |
| 項目 84 | 0.4386 | -0.0249 | 0.2218 | -0.0376 | -0.0707 | 0.2486 |
| 項目 69 | 0.4234 | -0.1204 | 0.0935 | 0.3716 | -0.0462 | 0.3427 |
| 項目 13 | 0.3568 | 0.3220 | 0.2388 | 0.2224 | -0.0741 | 0.3430 |
| 項目 47 | 0.3555 | 0.1312 | 0.1560 | -0.1001 | 0.1105 | 0.1914 |
| 項目 71 | 0.3524 | 0.1336 | 0.0582 | 0.3249 | -0.1134 | 0.2638 |
| 項目 15 | 0.3470 | 0.2190 | 0.1069 | 0.2026 | -0.1176 | 0.2346 |
| 項目 85 | 0.3400 | 0.0964 | 0.0768 | 0.3372 | 0.2108 | 0.2890 |
| 項目 7 | 0.2851 | -0.0725 | 0.0663 | 0.1499 | 0.1915 | 0.1501 |
| 項目 29 | 0.2618 | 0.6733 | 0.1226 | 0.2453 | 0.0067 | 0.5971 |
| 項目 26 | 0.1994 | 0.6460 | 0.1199 | 0.1847 | 0.1098 | 0.5177 |
| 項目 25 | 0.1183 | 0.6125 | -0.0394 | 0.1795 | 0.1570 | 0.4476 |
| 項目 40 [◇] | 0.4273 | 0.5652 | 0.0611 | 0.2837 | -0.0057 | 0.5863 |
| 項目 39 | 0.1741 | 0.5511 | 0.1697 | 0.1925 | -0.1051 | 0.4109 |
| 項目 45 | 0.2125 | 0.5409 | 0.2145 | 0.0280 | 0.2209 | 0.4335 |
| 項目 88 | 0.2114 | 0.5322 | 0.2061 | -0.0052 | 0.0471 | 0.3726 |
| 項目 21 | 0.0845 | 0.4578 | 0.1693 | 0.3205 | 0.0906 | 0.3564 |
| 項目 49 | 0.2533 | 0.4552 | 0.1515 | -0.0375 | -0.0341 | 0.2969 |
| 項目 99 | 0.0635 | 0.4485 | 0.3156 | 0.2128 | 0.1989 | 0.3896 |
| 項目 98 | 0.0235 | 0.4215 | 0.3881 | 0.2869 | 0.1092 | 0.4231 |
| 項目 5 | -0.0969 | 0.3732 | -0.0249 | -0.0236 | 0.1213 | 0.1646 |
| 項目 23 | 0.1134 | 0.3399 | 0.1376 | 0.3175 | -0.0440 | 0.2500 |

| | | | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|--------|
| 項目51 | -0.2043 | 0.2857 | 0.1251 | 0.0321 | 0.2179 | 0.1874 |
| 項目53 | 0.1151 | 0.2601 | 0.2021 | 0.0945 | 0.2586 | 0.1975 |
| 項目97 [◇] | 0.4079 | 0.4308 | -0.1708 | -0.1904 | 0.2194 | 0.4655 |
| 項目95 | -0.2222 | 0.4337 | -0.3370 | -0.1259 | 0.2933 | 0.4529 |
| 項目58 | 0.1635 | 0.1456 | 0.6628 | 0.0818 | 0.0552 | 0.4969 |
| 項目34 | 0.2746 | -0.0186 | 0.6046 | 0.0178 | 0.0667 | 0.4460 |
| 項目20 | -0.0585 | 0.2628 | 0.5926 | -0.0008 | 0.0664 | 0.4280 |
| 項目59 | 0.0445 | 0.1290 | 0.5919 | 0.1327 | 0.2030 | 0.4278 |
| 項目31 | 0.1981 | 0.3417 | 0.5839 | 0.0711 | -0.1108 | 0.5148 |
| 項目8 | 0.1047 | 0.0207 | 0.5753 | 0.2501 | 0.1476 | 0.4267 |
| 項目33 | 0.2063 | 0.1661 | 0.5415 | 0.1017 | 0.0959 | 0.3829 |
| 項目94 | 0.2291 | 0.2202 | 0.5210 | 0.0493 | 0.0841 | 0.3819 |
| 項目72 | 0.2324 | 0.2930 | 0.4894 | 0.1060 | 0.0947 | 0.3995 |
| 項目61 | 0.0200 | 0.0160 | 0.4830 | 0.2566 | 0.1488 | 0.3219 |
| 項目1 | 0.2964 | 0.1179 | 0.4640 | 0.2368 | -0.0378 | 0.3745 |
| 項目83 | 0.0436 | 0.0190 | 0.4433 | 0.0501 | 0.2869 | 0.2836 |
| 項目9 | 0.0143 | 0.1106 | 0.2907 | -0.0244 | 0.1339 | 0.1155 |
| 項目19 | 0.1683 | 0.2214 | 0.2834 | 0.2270 | 0.0721 | 0.2143 |
| 項目63 | 0.1002 | -0.1060 | 0.2540 | 0.0955 | 0.1653 | 0.1222 |
| 項目96 | 0.0021 | -0.2390 | -0.3570 | 0.0466 | 0.2865 | 0.2688 |
| 項目12 | 0.2424 | 0.1319 | 0.3131 | 0.5674 | 0.0020 | 0.4962 |
| 項目11 | 0.3108 | 0.2310 | 0.2552 | 0.5047 | -0.1051 | 0.4809 |
| 項目22 | 0.1770 | 0.1332 | 0.2050 | 0.4814 | -0.1867 | 0.3576 |
| 項目55 [◇] | -0.0023 | 0.1563 | 0.2735 | 0.4633 | 0.4198 | 0.4901 |
| 項目10 [◇] | -0.1012 | 0.0487 | 0.2230 | 0.4633 | 0.4289 | 0.4609 |
| 項目2 | 0.1955 | -0.0541 | 0.2404 | 0.4490 | 0.1120 | 0.3131 |
| 項目27 | 0.0912 | 0.2217 | -0.0606 | 0.4285 | -0.0991 | 0.2546 |
| 項目18 | 0.1151 | 0.2133 | 0.3124 | 0.3977 | -0.0474 | 0.3167 |
| 項目24 | 0.0977 | 0.3815 | 0.1783 | 0.3915 | 0.0061 | 0.3401 |
| 項目4 | 0.3065 | 0.1839 | -0.0446 | 0.3730 | -0.0008 | 0.2688 |
| 項目92 | 0.3056 | 0.3060 | 0.0204 | 0.3283 | 0.1958 | 0.3335 |
| 項目3 | 0.0797 | 0.2823 | 0.2296 | 0.3187 | -0.0929 | 0.2490 |
| 項目68 | 0.1062 | 0.1859 | -0.0649 | 0.2707 | 0.0957 | 0.1325 |
| 項目80 | -0.0246 | 0.0717 | 0.2154 | -0.2560 | 0.1982 | 0.1569 |
| 項目74 | 0.0658 | -0.0552 | -0.0491 | -0.3892 | 0.3056 | 0.2546 |
| 項目82 | -0.0330 | 0.1686 | 0.3632 | 0.0376 | 0.4982 | 0.4111 |
| 項目81 | -0.0204 | 0.1678 | 0.3650 | 0.0422 | 0.4689 | 0.3835 |
| 項目56 | -0.0612 | 0.0426 | 0.2735 | 0.3676 | 0.4450 | 0.3500 |
| 項目41 | 0.1760 | 0.1917 | 0.1146 | 0.0423 | 0.4118 | 0.2522 |
| 項目54 | -0.0651 | 0.0437 | 0.0204 | 0.0512 | 0.4058 | 0.1739 |

| | | | | | | |
|-------|---------|---------|---------|---------|--------|---------|
| 項目93 | -0.0669 | 0.1457 | 0.0540 | -0.0418 | 0.3738 | 0.1701 |
| 項目44 | 0.1821 | 0.1082 | 0.0404 | -0.0377 | 0.3481 | 0.1691 |
| 項目100 | -0.0474 | -0.1042 | 0.0014 | -0.1566 | 0.3431 | 0.1554 |
| 項目57 | 0.0737 | -0.0567 | 0.0584 | -0.0912 | 0.3015 | 0.1113 |
| 項目64 | 0.0148 | 0.0802 | 0.0471 | -0.1098 | 0.2875 | 0.1036 |
| 項目42 | 0.0165 | -0.1306 | -0.0664 | 0.1017 | 0.2832 | 0.1123 |
| 項目77 | 0.0024 | 0.1905 | 0.1889 | -0.2601 | 0.2629 | 0.2087 |
| 項目78 | 0.0386 | 0.2446 | 0.1946 | -0.1384 | 0.2622 | 0.1871 |
| 項目6 | -0.0633 | -0.0407 | 0.1013 | -0.0792 | 0.1112 | 0.0345 |
| 説明分散 | 7.1170 | 6.7452 | 6.4905 | 4.8912 | 3.4914 | 28.7353 |

(注) 網かけされた数値は|0.40|以上。

◇ 両義性を示した項目

因子の解釈にあたり、基本方針として、表2の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。100の調査項目のうち、53項目が.40以上を示した。53項目の内訳は、SILLからの項目が34項目、その他が19項目であった。

因子Iに.40以上の負荷量を示した項目を表3にあげた。因子Iには項目35、86、36、28、46、50、14、16、65、37、91、89、38、66、32、84、69の計17項目が含まれていた。以上の項目のうち項目14、項目89、項目32に両義性が認められたので、この3項目は解釈の際にはずした。その上で因子Iに含まれている項目内容をみると、英語を積極的に口に出そうと努力をしたり(項目86、35、65、91、66)、英語で書かれた本を読んだり(項目36、16)、英語圏の文化を学習しようと思ったり(項目50)、常に自分の英語力を高めようという、明確な目標をもって(項目37)、自分の英語力の上達ぶりを確かめながら勉強する(項目38)というように、積極的かつ意識的に英語に接していることがわかった。また、会話の際には相手が次に何を言うかを予測しながら(項目28)、間違ったときには自分の英語を直してもらうように外国人に頼んでいること(項目46)も明らかになった。最後に、カセット・テキスト付きの長文読解教材を用いたり(項目84)、ラジオの英会話などの番組を聞くなど聴覚教材を用いながら(項目69)英語に接する努力をしていることもわかった。以上から、因子Iは学生が授業以外の場面で、英語に積極的に接触しようとする態度を表していると考えられ、「積極的英語接触努力」と命名した。

次に、因子IIに.40以上の負荷量を示した項目を表4にあげた。因子IIには項目29、26、25、40、39、45、88、21、49、99、98、97の計12項目が含まれていた。このうち項目40、97は両義性を示した。その上でこれらの項目内容をみると、まず、誰かと話していて適切な単語や表現を思いつかなければ、似たような意味の単語や表現で代用したり(項目29、26)、ジェスチャーを用いたり(項目25)、相手の言うことがわからなければゆっくり話してもらったり、繰り返してもらったり(項目45)、同時に相手が自分の発音を理解してくれなければスペルを言ったり(項目88)、ALTや外

表3：因子Ⅰの負荷の大きい項目とその内容：(第Ⅰ因子：17項目(SILL10+その他7))

| 項目番号 | 負荷量 | 項目の内容 |
|-----------------|-----|---|
| 35 | .70 | 英語で話しかけられる人をさがし、英語を話す機会をつくる |
| 86 | .70 | 自分がしている行動や自分がみたものについて英語で説明できるかどうか試してみる |
| 36 | .69 | 英語で書かれた本を読む機会をなるべく多くつくり、英語の勉強に役立てようとする |
| 28 | .53 | 誰かが英語で話すのを聞いているとき、その人が次に何を言うかを予測することを心がけている |
| 46 | .52 | 英語を話しているとき、間違えたら直してもらおうように AETなどの外国人に頼む |
| 50 | .50 | 英語で話す人々の文化について学習しようとして心がけている |
| 14 [◇] | .50 | 英語で話すとき、自分から進んで会話を始める |
| 16 | .50 | 英語で書かれた本を読むのが楽しい |
| 65 | .49 | 単語や表現をおぼえたら早速それを使って誰か(友人、先生、外国人の先生など)に話しかける |
| 37 | .48 | 自分の英語力を高めようという、はっきりした目標がある |
| 91 | .47 | 英語で会話をするとき授業で習ったばかりの単語や文章を使ってみることがよくある |
| 89 [◇] | .46 | 英語を練習するという目的で、誰かと話したことがある |
| 38 | .45 | 自分の英語力がどのくらい上達したかを確かめながら勉強する |
| 66 | .45 | 暗記した文章を会話のとき使う |
| 32 [◇] | .45 | 英語を話している人がいたら、その人の話しに耳を傾ける |
| 84 | .44 | カセット、テキストつきの長文読解教材を用いて(買ったり、借りたりして)勉強する |
| 69 | .42 | ラジオの英会話などの英語の番組を聞く |

◇ 両義性を示した項目

国人の先生には英語で質問したり(項目49)、という何とかコミュニケーションをしようとする積極性が感じられる。さらに、また、英語を話すとき、不安ではあるがリラックスするように自ら努め(項目39)ている姿も明らかになった。また、長い英単語の意味がわからないときは部分からその意味を推測したり(項目49)、という工夫もしている。項目99、98は目の内容を見ると、英語の授業中、問に対して、答えを頭の中でいってみるといふ、意識的に英語に接しているというものであった。以上から、因子Ⅱは学生がコミュニケーションに対して、不安を克服しながら積極的に取り組もうとする意欲を表していると考えられ、両義性を示した2項目の内容を加味しても、「コミュニケーション志向」と命名した。

表4：因子Ⅱの負荷の大きい項目とその内容：(第Ⅱ因子：12項目(SILL8+その他4))

| 項目番号 | 負荷量 | 項目の内容 |
|-----------------|------|---|
| 29 | .67 | 誰かと英語で話していて、単語を思いつかないとき、似たような意味の単語や語句を使う |
| 26 | .65 | 誰かと英語で話しているとき、適切な表現を思いつかなければ、似たような意味の別の言い方で代用する |
| 25 | .61 | 誰かと英語で話しているとき、適切な表現が思い浮かばなければ、ジェスチャーを使う |
| 40 [◇] | .57 | 間違うかもしれないと不安になるが、勇気をだして英語を話すようにしている |
| 39 | .55 | 英語を話すとき、うまくいえるかどうか不安になるがリラックスするようにしている |
| 45 | .54 | 英語がわからないとき、ゆっくり話してもらったり、繰り返して言ってもらうように頼む |
| 88 | .53 | 相手が自分の発音を理解しなかったら、相手がわからなかった単語や語句のスペルをいう |
| 21 | .46 | 長い英単語の意味がわからないとき部分的に意味がわかればそこから意味を推測する(eg. classroom) |
| 49 | .46 | AETや外国人の先生には、英語で質問する |
| 99 | .45 | 英語の授業中、他の学生が間違ったと気づいたら頭の中で、正しい答えをいってみる |
| 98 | .42 | 英語の授業中、先生があなたを指名しなくても、頭の中で答えをいってみる |
| 97 [◇] | -.43 | 英語で話すのが精神的に苦痛なので、英語で話さなければならない状況をできるだけ避ける |

◇ 両義性を示した項目

また、因子Ⅲに .40以上の負荷量を示した項目を表5にあげた。因子Ⅲには項目58、34、20、59、31、8、33、94、72、61、1、83の計12項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、英語の授業のため英語の勉強時間はしっかり取れるよう計画を立て(項目34)、たいてい予習、復習をし(項目59、8)、効果的な勉強法を常にみつけようと心がけながら(項目33)、授業で聞き逃した単語、文法は授業以外の時間に勉強している(項目58)姿が浮び上がる。また、文法に注意し、授業中先生に質問をし(項目20、94)、同時に自分の間違いにも注意し、気づいたら、その後の学習に生かし(項目31、72)ている。さらに辞書を引いて勉強するときにも例文をみたり既習のことと関連づけていること(項目61、1)もわかった。最後に受験のための勉強もここに含まれていたが、文法中心であると推測される。以上から、因子Ⅲは学生が

英語の授業に焦点をあて、文法を重視している英語学習態度を表していると考えられるので、「文法重視計画学習」と命名した。

表5：因子Ⅲの負荷の大きい項目とその内容：(第Ⅱ因子：12項目(SILL6+その他6))

| 項目番号 | 負荷量 | 項目の内容 |
|------|-----|--|
| 58 | .66 | 授業で聞き逃した単語や文法について、授業以外の時間に勉強したり、練習する |
| 34 | .60 | 英語の勉強時間が十分取れるように計画を立てている |
| 20 | .59 | 文法的に正しいようにと、できるだけ文法を意識する |
| 59 | .59 | 英語の授業のため、たいてい予習する |
| 31 | .58 | 自分の英語の間違いに注意し、もし気づいたらその後の学習に生かす |
| 8 | .58 | 授業で勉強したところはたいてい復習する |
| 33 | .54 | 英語の勉強が効果的にできるような勉強法を見つけようと心がけている |
| 94 | .52 | 英語の授業中、ある文法規則について例外があることに気づいたら、先生に説明を求める |
| 72 | .49 | 人に自分の英語の間違いを指摘されたら、その後の学習に生かす |
| 61 | .48 | 辞書で単語を引くとき、その語が使われている例文をいつも見る |
| 1 | .46 | 英語で新しい事項(文法事項など)を勉強するとき、すでに知っていることと関連させておぼえる |
| 83 | .44 | 受験のための参考書、問題集を勉強する |

さらに、因子Ⅳに .40以上の負荷量を示した項目を表6にあげた。因子Ⅳには項目12、11、22、55、10、2、27の計7項目が含まれていた。このうち、項目55、項目10が両義性を示していたので、解釈からはずした。残りの5項目の内容をみると、英語を一人で学習するとき、発音に注意を払って英語を母語とする人の発音や話し方をまねて正しく発音したり話す練習をしている(項目12、11)姿がうかがえる。また、英語を聞いたり読んだりするとき、単語一語一語を辞書で調べたり、訳したりしないで意味を推測する(項目22、27)一方、単語や英文を暗唱したり書いたり、英文と一緒におぼえる努力をしている(項目55、10、2)こともわかった。以上より、因子Ⅳは英語を一人で学習するときの英語の勉強方法を表していると考えられ、「個人的英語学習方法」と命名した。

最後に、因子Ⅴに .40以上の負荷量を示した項目を表7にあげた。因子Ⅴには項目82、81、56、41、54の計5項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、項目82と56が基本的英文の暗記、項目81と54が単語、熟語の暗記に関するものである。項目41は自分をほめるという他の4項目とは内容が異なるものであったが、全体として

因子Vをみると、基本的な英単語、英文の暗記を表していると考えられるので、因子Vは「基本英単語・英文の暗記」と命名することにした。

表6：因子IVの負荷の大きい項目とその内容：(第II因子：7項目(SILL6+その他1))

| 項目番号 | 負荷量 | 項目の内容 |
|------|-----|--|
| 12 | .57 | 英語の発音が正しくできるように練習する |
| 11 | .50 | 英語を母国語とする人と同じように話そうとまねる努力をする |
| 22 | .48 | 英語を聞いたり読んだりするときには、単語一語一語を日本語に訳さないように心がけている |
| 55◇ | .46 | 基本的な英文は、何度も暗唱しておぼえる |
| 10◇ | .46 | 新しい単語や語句をおぼえるとき何度も声に出したり書いたりしておぼえる |
| 2 | .45 | 単語や語句をおぼえるとき、英文と一緒にしておぼえる |
| 27 | .43 | 英語の長文を読むときに、意味のわからない単語をいちいち辞書で調べない |

◇ 両義性を示した項目

表7：因子Vの負荷の大きい項目とその内容：(第II因子：5項目(SILL1+その他4))

| 項目番号 | 負荷量 | 項目の内容 |
|------|-----|---|
| 82 | .50 | 入試によく出る基本の英文(基本構文など)を暗記する |
| 81 | .47 | 入試に出る単語、熟語を暗記する |
| 56 | .44 | 基本的な英文は、何度も紙に書いておぼえる |
| 41 | .41 | 英語で話を通じたり、成績がよかったり、つまり英語で何かよい結果がでたとき、自分をほめる |
| 54 | .41 | 単語は単語テストを利用しておぼえる |

5. 研究の考察

5.1 英語の授業中の態度についての因子について

英語の授業中の態度についてのそれぞれの因子が解釈された内容を一覧すると、以下のようになった。

因子I：積極的英語接触努力

- 因子Ⅱ：コミュニケーション志向
- 因子Ⅲ：文法重視計画学習
- 因子Ⅳ：個人英語学習方法
- 因子Ⅴ：基本英単語・英文の暗記

以上の5因子は、Oxfordの開発したSILLの分類とは、異なる結果であった。実際、Oxfordの50項目のうち、残った項目は34項目であり、日本人EFL学習者の学習方略を測定する項目として、必ずしも最適ではないことがわかった。

5.2 本調査にむけての質問項目の選定について

最後に、本調査で扱った100個の質問項目から日本人EFL学習者の英語の学習方略を調べるための項目を選定した。

まず本研究で扱った100項目の中から平均と標準偏差から天井効果、フロア効果を示した15項目を削除した後、85項目を基に因子分析を行った結果、5因子が抽出され、53項目が残った。この5因子について、それぞれの因子が示す内容を代表していると考えられる項目を選択し、計17項目を最終的に調査項目として選択した。

1

引用文献

- Brown, D.B. 1994. Principles of Language Learning and Teaching (3rd ed.). Prentice Hall.
- Iijima, H. 1993. A Study on the Effects of Pre-Reading Activities on EFL Reading Comprehension. Unpublished MA Thesis. Joetsu University of Education.
- Ogino, K. 1994. A Study of Learner Characteristics of Japanese EFL Junior High School Students: Learning Style, Strategies, Motivation and Gender. Unpublished MA Thesis. Joetsu University of Education.
- Oxford, R.L. 1990. Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know. Heinle & Heinle Publishers.
- Politzer, R.L. & McGroarty, M. 1985. An Exploratory Study of Learning Behavior and Their Relationship to Gains in Linguistic and Communicative Competence. TESOL Quarterly, 19, 1, 103-124.
- Watanabe, Y. 1991. Classification of Language Learning Strategies. International Christian University Language Research Bulletin, 6, 75-102.

平成9・10年度科学研究費補助金

基盤研究C

日本人学習者の言語（国語・英語）学習に
おける学習方略のモデル構築に関する研究

（研究課題番号：09680210）

研究代表者 北條 礼子

平成11年3月

印刷：石黒印刷所
